



ビオトープ・サロン 広がっています！森のようちえん

【 センス・オブ・ワンダー ~ 感じること。わかちあうこと。 ~ 】

記者：河野登子（会員）

森のようちえん・・・それは、
デンマークの一人のお母さんが、自分の子どもとお隣の子どもの森の中で保育したのが始まりと言われています。自然の中での幼児教育や保育に共感する人々の間でスカンジナビアからドイツへ・・・そして、日本でも、たくさんの森のようちえんが活動しています。
日本では自然環境の中での幼児教育や保育を「森のようちえん」と呼び、園舎を持つようちえん、園舎を持たないようちえんなどそのスタイルは様々ですが、意図的に大人の考えや考え方を強要せず、子どもが持っている感覚や感性を信じ、そして引き出すようなかわり方をしています。

- 森のようちえんが大切にしていることは、
- 自然はともだち ~ 自然の営みに合わせながら、自然の中で、子ども、親、保育者が、共に育ちあうこと~
 - いっぱい遊ぶ ~ 自然の中で、仲間と遊び、心と体のバランスのとれた発達を促すこと~
 - 自然を感じる ~ 自然の中でたくさんの不思議と出会い、豊かな感性を育むこと~
 - 自分で考える ~ 子どもの力を信じ、子ども自身で考え行動できる雰囲気をつくること~

森のようちえんでは、子どもたちが自然遊びを通じて美しいものを美しいと感じる心や、未知なものの目に目を見る感性「センス・オブ・ワンダー」をいつまでも失わないように、その感激、神秘などを子どもと一緒に再発見し、そばにいる大人が子どもと一緒にわかちあうことを大切に考え、それぞれのスタイルで活動を展開しています。詳しくは、「森のようちえん全国ネットワーク <http://www.morinoyouchien.org/>」をご参照下さい。

今回は「森のようちえん」活動事例として、立神峡里地公園をご紹介します。

立神峡里地公園は、熊本市から南へおよそ1時間、熊本県のほぼ中央に位置する氷川町にあります。この公園は、平成12年度より環境学習拠点として、園内の田んぼや里山、園内を流れる清流氷川をフィールドに、数多くの環境教育プログラムが行われています。当初、参加者は小学生から大人が多かったようですが、幼児期こそが『自然体験活動・野遊び』を通じて豊かな感性を育む重要な時期と考え、平成19年度より、幼児対象のプログラムも開始されました。子どもたちに、より多くの「自然体験・外遊び」の場を増やし、保護者、保育者、地域の皆さんなど、周りの大人もいっしょに学んでいく活動にしていきたいと考え、幼児が本来持っている豊かな感受性を育み、周りの自然や自分、他者に対して思いをめぐらす心を育むこと、を大切に取組まれています。

詳しくは、「立神峡里地公園ホームページ <http://www.tategamikyou.com/>」をご参照下さい。

同公園の館長より実際に運営する立場から、“森のようちえんへの思い”をいただきました。

.....

【 森のようちえんで思うこと ~ 里山の暮らしと自然につつまれて ~ 】

寄稿：幸山昌生（立神峡里地公園館長）

里山へ遊びにくる親子といっしょに、森へ入っています。同じ場所でも季節が違えば、里山はいろんな表情を持っていることに気づきます。やってくる幼児にとって、里山の森や河原は不思議がいっぱいの大きな遊び場です。また日本人が伝承してきた里山での暮らしぶりを親子で体験する、味噌作りや田んぼや畑の学校、には大きな学びもあります。人は知識だけではなく、体感することで、智慧が身についていきます。小さなころから、人と自然との関わり方を体感し、そのなかで生きる喜びや生命のつながりに気づいていくのだと思います。

この取組みは、わたしたちスタッフ、保護者、回りにいる大人もいっしょになって思い切り楽しむこと、感じること、わかちあうこと、誰もが持っている「センス・オブ・ワンダー」を大切に育むこと、そして子どもたちひとりひとりが、一步一步自分の足で歩き始めるまで、あせらずじっくり見守っていく、そんな取組みです。そして、活動を支えてくれる、生きものの大きな宝箱「里地・里山」に感謝しています。

森のようちえん“りとろ”2010年1月~3月
“ふゆからはるへ”での活動の様子



はじまりの会・記念植樹



みんなでおやつづくり



スタッフとのコミュニケーション？

ビオトープ・セミナー 資格試験に挑戦して基礎知識を修得しよう!

ビオトープ管理士資格試験過去問題 出展：(財)日本生態系協会主催「ビオトープ管理士セミナー」のテキストより
無断転載禁止：本紙は財団法人日本生態系協会の許可を得て転載しています。 記者：編集担当

【計画部門1級記述問題：正答・解説は次号で紹介】

問018：都市郊外への無秩序な開発を抑制するためには、農地に対する開発規制のみならず、農業経営を安定させるための様々な工夫が求められます。農地は生産地であると同時にビオトープとしての機能も期待されています。しかし、農地においてビオトープとしての質を高めることは、農業経営とは相反する面も多くあります。

都市近郊の農地を想定し、ビオトープの考えを取り入れながら農業経営を持続可能にするためにはどうしたらよいか。そのアイデアを項目別に整理し、400字以内で説明しなさい。

前号017の正答「3」

ホトケドジョウの生息環境は、水質は農薬や家庭雑排水の影響が少なく清浄で、水温は夏季でもあまり上昇しないという条件が必要である。/ カワセミの繁殖は3～8月で、垂直な土手に巣穴をつくる。くちばしと足を使って50cm～90cmほどもある横穴を掘る。穴の一番奥はふくらんでおり、ここに3個～4個の卵を産む。/ ニホンアカガエルは本来北方系の両生類といわれており、浅い水辺で水温が高くない1～3月頃に産卵する。成体は主に雑木林で生活する。/ オオムラサキの主な生息地は雑木林で、成体は花の蜜ではなくコナラやクヌギの樹液を吸う。幼虫の食樹はエノキやエゾエノキで、卵から孵った幼虫は夏から秋にかけてエノキの葉を食べて成長する。冬は地面に降りて食樹の根際や空洞内に溜まった落ち葉の中で越冬する。春に休眠から覚めると再び食樹に登って葉を食い、更に成長を続け蛹になる。/ カヤネズミの生息地は、イネ科植物が優占する草地、河川敷、堤防、麦畑などで、低地の草地、水田、休耕田、沼沢地などのイネ科植物が密生した水気のあるところに多い。九州など南部の地域では春から初夏にかけてと、秋から初冬にかけての2回繁殖するが、関東地方では夏のみである。

最近の受験者は、環境NPO構成員、国・地方公務員、外郭団体や地方自治体職員、企業退職者が増加傾向です。

ビオトープ・ナビ 雑学コーナー

【時間による「すみわけ」でしようか! ?】

記者：黒田明久(会員)

2009年6月30日の昼時に、阿南市大野町で見たことのない鳥を発見!思わずシャッター…調べてみるとゴイサギでした。



特に珍しい鳥でもなさそうですが、実際に見た人は少ないかもしれません。というのも、ゴイサギは主に夜行性だからです。これは、時間による「すみわけ」でしようか?

図鑑によると、【頭上から背にかけて黒く、翼が灰色のサギ。冠羽は白い。幼鳥は羽色が成鳥とは全く異なり、全身が白い斑点のある褐色でホシゴイと呼ばれる。成鳥になるのは約3年かかる。世界中の温暖な地域に分布し、日本では本州から九州にかけて繁殖する。集団で樹上に巣をつくる。コサギなど他のサギ類と混合コロニーをつくることが多い。夜行性で、暗くなった頃、水上に出た枝などに止まり、魚やカエルを待ち伏せして捕える。月明かりの空をふわふわとした感じで、時々「ゴァー、ゴァー」と鳴きながら飛び、夜鳥(ヨガラス)とも呼ばれる。】とありました。

昼間は、木の上の方で眠っていて、発見はなかなか難しいそうなので、見つけた人は“ラッキー”かもしれませんね。

ビオトープ・ナビ

今月の“たからもの”

【子どもの人気者!】

記者：編集担当



熊本市「江津湖」にて撮影

日本固有種のサワガニは、一生を淡水域で過ごす純淡水性のカニです。水質などの環境の状態を調べるための生物指標として、サワガニがいれば「きれいな水」といわれています。

撮影した「江津湖」は市民の憩いの場であり、暑い時期にはもってこいの場所です。市街地でありながら、1日約40万トンの湧水が湧き出るといって驚きですね!?

つるぎ町貞光の方では、別名“イデンコガニ”と呼ばれているそうです。(「いでんこ」とは排水溝のこと)みなさん、聞いたことはありますか?

編集後記

先日、実家から“すだち”を送ってもらい、久々に徳島の味を楽しみました。こちらでは同じような食べもので“かぼす”があり、“すだち”の居場所はありません(涙)。微力ですが、お友達に少しずつ配り“すだち”と“徳島”のアピールをしておきました(笑)。やっぱり慣れ親しんだ徳島の味は忘れられませんね。

ビオトープに関するお役立ち情報はもとより、皆様の活動やお仕事、日常生活を通じて見たり感じたりしたこと、身近な自然の春夏秋冬や喜怒哀楽のご寄稿をお待ちしております。ニュースを読んだ感想やご寄稿はメールアドレスまで。また、過去のニュースはホームページからもご覧いただけます。 編集：河野登子

【E-mail : tokotoko.utan@gmail.com URL : http://biotopetokushima.yu-yake.com】